

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎



明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 創刊号  
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成16年1月31日



**《年頭所感》** 昨年来の懸案事項であるイラクの戦後処理、北朝鮮による同胞の拉致と核開発問題、未曾有の経済不況等々日本を巡る問題は山積している中で、正月のお屠蘇気分も抜けきらない1月8日、国際的、歴史的見地からも日本固有の領土である竹島を、韓国が恰も自国領であるかの如く、独島などと呼称して記念切手を発行すると戯言をほざいてきた。例によって、弱腰の外務省はたいした抗議もしないで事態を有耶無耶に処理しようとしている。

時を前後して元日に首相が靖国神社を参拝したが、中・韓・朝の経済援助を目的とした内政干渉を恐れて「初詣に行った」と記者団の質問に答えた。このことは靖国に眠る御英霊の御霊を冒瀆するものであって絶対に黙認するわけにはいかない。純な気持で初詣をするのであれば皇祖であらせられる天照大神が祀られている伊勢神宮に参拝するのが筋である。このようにパフォーマンスと詭弁を弄し、創価学会の機嫌を伺うだけの首相が率いる内閣には、最早、期待するものは何もなく、この内閣が続く限り日本を覆う闇は一層深まるばかりである。今こそ我々は、心を一にして民族運動に精進し、日本を取り巻く闇を切り裂く正義の劔とならんことを提言する。 編集人・戸出蒼流

**《ロシア人の大罪》** 昭和16年4月7日、時の松岡洋右外相とソ連のスターリン首相との間で日ソ中立条約が締結されたが、昭和20年8月8日条約の有効期間中であるにも拘らず、当時敗色の濃かった日本に対して火事場泥棒の如く宣戦布告し、北方領土を略奪したのである。当時、島に住んでいた大多数の日本人は捕らえられ極寒のシベリアに捕虜として抑留されたのである。昭和の作曲家吉田正氏は「あの苦しみは二度と味わいたくない。日本がある限り、シベリア抑留というソ連の蛮行を許してはならない」と語ったことがある。食べ物もろくに与えられないうえでの強制労働と、暖房も無い血も凍るような極寒地での生活で健康を害し、遠い「異国の丘」から日本に帰る日を、日本にいる家族に会える日を夢見て亡くなっていった日本人と日本兵の心中を思うと、ロシア人の犯した大罪を断じて許さず、糾弾し続けることが我々の責務である。

**《回顧/三島事件》** 昭和45年11月25日自衛隊市ヶ谷駐屯地で著名な文人が、自衛隊の決起を訴え、一人の武人として自らの命を絶った。男は天皇を中心とした歴史と文化と伝統を守ることの重要性を、太平の美酒に酔う日本と日本人に訴えながら割腹に及んだ。世に言う「三島由紀夫事件」である。三島の辞世に次の一首がある。

“ 散るをいとふ 世にも人にも さきがけて 散るこそ花と 吹く小夜嵐 ”



「散るをいとふ世にも人にもさきがけて」の中には、生命尊重だけを至上とする当時の世相に対する痛烈な批判が込められていると考える。米国の主導でたった一週間で制定された憲法で戦争放棄、武力放棄を強いられて以来、多くの日本人は「戦う」という気概を失い、平和と民主主義を錦の御旗に掲げエコノミックアニマルと化して金儲けに没頭した結果、かけがえの無いものを失ってしまったのである。すなわち日本民族の尊厳と人間としての魂である。そのような時代背景の中、三島は「散る」こと、すなわち死によって精神の「花」を咲かそうとしたのではないだろうか。「散る」という三島の行動は微かに「花」を揺らすだけのさやかなものであったかもしれないが、「小夜嵐」のように時代は

変わってもいつまでも日本人の魂を揺らし続けて行くことであろう。

**連載・吉田松陰-** 江戸の獄を出て37日間、駕籠に押し込められたまま、男は故郷の町に帰ってきた。その様は駕籠の中の鶏のようであったが、その志は遙か雲の果てを行く鶴のように世界に向かって羽ばたいていた。男の名吉田松陰、松陰は7ヶ月前、下田沖の米国軍艦を目指して小船を漕いでいた。米国に密航し、世界の情勢を知り日本の危機を救おうと国禁を破り、決死の行踏み切ったのである。折りしも国中は攘夷と開国を巡って緊迫した状況であった。しかし、望みは叶えられず、今松陰は一日中陽の射さない獄中であつた。そこには11人の囚人が、前途に何の光明も無く、絶望のうちに暮らしていた。